

月刊

# いじろのとも

第七卷

七月号

他己あればこそ

今日もまた

生きる喜び

わき出るは

自己を支える

他己あればこそ

生き生きするのは

人が

生き生きするのは

生かされて

生きていることを

知るとき

エゴを知る

自分のエゴに

気付いた時

他人の

エゴが分かる

# 人生を考え直して

## みたい人は(三二)

『聖書』解説(七)

マタイ福音書の第五章を続けます。

九平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです。

私は、実は、「平成」元年に得度し、四度加行(しどけぎょう)という真言密教の修行ののち伝法灌頂(でんぼつかんじょう)法を伝える儀式)を受け、僧侶としての位(僧階)を頂きましたが、その時、僧の名である法名を、実名の善次郎の善を残し、平成の成を頂いて「善成」としました。

そういう因縁もあって、ある時、平成の「平」という字にあらためて注意してみても、その意味の素晴らしさに驚きました。そして、次のような詩を二つ作りました。

一つは、本誌の平成七年十月号に、もう一つは、今年の一月号に、それぞれ載せました。

「平のつく語」

いま平成の御世 / 平が上につく語 / 三つ / 平等 / 平和 / 平安 / 毎日 / 毎日 / 祈りたい

「平和の平の字」

平和の平の字には / バランスをとるといふ / 意味がある / 自他のバランスが平 / 自他の統合が和

この、新約聖書の第五章九節を読んで、私はすぐ、いま紹介しました詩を作ったことを思い出したので、

また、和の字の大切さにつきましては、ご存じのとおり、聖徳太子は「和を以て貴しとす」と言われました。

いま、世界は、共産主義イデオロギーが崩壊し、自由主義との二大対立がなくなりましたが、しかし、それに代わって、民族の対立、国家の対立、宗教の対立、人種の対立、エゴの対立など、さまざまな対立が目立ってきました。そして、世界の方々にテロが横行し、多くの人がその犠牲になっています。

日本でも、経済は世界一にまで発展し、どんな深刻な対立もありそうにないのに、国内においてすら、オウム真理教という宗教の名目で、無差別な殺人テロが行われました。また、学校ではいじめという、子どもたちの平

和を乱す行為が、毎日のようにマスコミをにぎわしています。平和（右の詩で詠っています平等・平安を含めて）の大切さは、どんなに強調してもし過ぎることはありません。平和（平等・平安）は、人類普遍の願いでありながら、いまだに達成できません。いや、ますます対立が激しさを増しているように思われます。

なぜなのでしょう。

結論から先に言いますと、私は、その原因は、文明開化するにつれて、経済的には豊かになって来ましたが、それに反比例して人間がますます個人主義化し、自己中心化して来たためだと思っています。

日本だけについて見ましても、例えば江戸時代では、今より経済的に貧しく、また殆どの人たちは読み書きができませんでしたし、科学も発達していませんでしたから、今と較べれば、人々の知識の量は比較にならほど少なかったと思われます。つまり、「あたま」は今と比較すれば、あまり発達していなかったと思われのです。

しかし、自分を越えたものを畏敬したり、信じたりすることは今よりずっとできたでしょうし、人を平気で殺すように残忍な行為をする傾向は、今よりはずっと弱かったと思えるのです。それは、例えば、十代で人を殺すというようなことは、昔はなかったと思うのですが、現

代では、八歳でも殺人を犯すような子どもが出てきたことをみて、分かります。

私の「人間精神の心理学モデル」で言いますと、現代は、自分を主張して生きようとする傾向、つまり「自己」ばかりが肥大し、それに較べて他者を求め、他者と仲良くして生きていこうとする傾向、つまり「他己」はだんだんと萎縮してきたと言えるのです。

このように、現代は多くの人が他己よりも自己を重視して生きていますので、必然的に競争が激しくなり、争いが起きます。ですから、平和を大切にすることは、昔よりずっと切実な問題となっているのです。ということとは、このキリストの言葉は、今こそ声を大にして叫ばなければならないということなのです。

では、このように大切な「平和をつくる」とはどんなことなのでしょう。

出だして紹介しました詩にもありますように、平和の平の字には、バランスを取るという意味があります。何のバランスかと言いますと、自己と他己のバランスなのです。自分ばかり主張するのではなく、他者のことも考慮することのバランスなのです。

実は、これは、中国儒教の中心的な教えと言えます。それを、孔子は「仁」と呼びました。一言で言えば、自

分を抑えて、人を立てることです。私のモデルで言いますと、「自己の情動」を制御して、「人の心を感じるころ」である「感情」を優先させることです。

自己の情動とは、自己の欲です。自己の名利を貪る欲です。また、快苦喜怒哀楽とか、「ねたみ・うらみ・つらみ・そねみ」など、人と比較して、あるいは人との関係で、自分が腹を立てることです。仁は、先ず、それを自己コントロールしなければなりません。

そして、人の情動を優先させることです。相手を思いやる愛をもつことです。

例えば、卑近な例で言いますと、喫煙があります。喫煙は自分の健康を害するだけではなく、周囲の人の健康をもむしばみます。あるいは飲酒があります。健康のためにたしなむ程度ならいいのですが、飲酒が過ぎますと、自分の身体的健康を害しますし、家族みんなの家計を圧迫します。もっと行き過ぎますと、酒にうさをはらして酒の量が増えて行き、身体だけではなく精神的な健康も害して、多くは家の中であばれたりします。また、男にとっては酒につきものの女遊びがあります。また、パチンコやマージャン、競輪・競馬・競艇などの賭け事があります。どれも、家庭をもつ人には、連れ合いや子どもに迷惑をかけることと思います。

自分の職業上では、金をけちり、人に迷惑をかけてでも、こうした自分の欲に溺れていく人もいます。それは坊主にすら当てはまります。かつて、高級外車を乗り回し「のむうつかう」の放蕩で、借金をつくり、自分が住職をしている寺を質に入れて、刑務所に入った坊主がいました。

このように、自分の欲を制御することは、とても難しいことです。特に、現代のように、所得が増え、個人の自由が尊重され、人々の匿名性が増し、欲望の追求が自由になってきますと、よほど気をつけていざないと、度を過ぎてしまいます。

でも、こうした欲の統制ができませんと、どこかで、他者を自分の欲の犠牲にする結果を招きます。人のみち（人倫）に反することをしなければならなくなってきた。法（真理）をおかすことになります。孔子で言いますと、仁の教えに反することになるのです。

平という字は、自己と他己のバランスを取ることを意味していますが、でも、自分の心掛けでこれを実現することは、きわめて難しいことなのです。

つまり、欲を制御して、他者を尊重することが平和には大切だと言われたから、「よし、今日からそうしてやる」と言って、すぐできることではないのです。

いま、学校では仁のことさえ教えなくなっています。でも、教えたからできるようになるかといえば、そう簡単には行きません。そこが、人間の難儀なところなのです。「あたま」が、他の動物とは比べものにならないほど発達した人間では、「あたま」で分かれれば、あるいは「あたま」の働きを表す「能力」が発達すれば、理性で仁のような徳を行うことができると考えがちですが、そうは行かないのです。

それが、平和の平の字だけではなく、「和」の字が付く意味なのです。詩にうたいましたように、それは自他の統合を意味しているのです。統合とは、意識して自己と他己とのバランスを取ることではありません。意識しなくても勝手にバランスがとれるのではなくてはならないのです。そこが難しいところなのです。

私の「精神モデル」で言いますと、それは、無意識あるいは潜在意識（私はそれを髄識とも呼んでいます）の統合なのです。自己に属する精髓（精神の精の髄）と他己に属する神髄（精神の神の髄）との統合なのです。別の言葉では生命蔵識と自然蔵識の統合なのです。仏教で言いますと、煩惱蔵識と如来蔵識です。

無意識の統合ということは、意識してできることではないということです。こうしよう、ああしよう、とはか

らってできることではないということです。老子で言えば、無為で自然（蔵識）に至るといったことなのです。

では、どうすればそうなれるのでしょうか。

キリスト教で言いますと、お祈りをするということです。人静かに、奥まった部屋でドアを閉めて、お祈りするのは。（仏教には、さまざまな修行法があります。）そうして、ひたすら聖者の教えを信じて、修行するとき、平和をつくる人になることができます。

そして、その時、その人は神の子と呼ばれるのです。

なぜかと言いますと、真に平和をつくる人は、この心の心底に誰でもが宿している、自分をこの世に贈った贈り主である神と、贈られて生きんとする生命力としての自己が、一体になることができた人だからです。つまり、神の子になったと言える人だからです。ここに至って、はじめて平和が不動なものとして実現されるのです。

こうした無意識での宗教的体験として、自己と神が一体となることができないとき、仁のような、意識領域のこころの働きを持ち出さなければならぬのです。

そして、意識領域では最も基本的働きである、こころの働きすらなおざりにされるとき、近代以降のヨーロッパ社会のように、哲学や道徳や法律や権利・義務が問題にされなければならぬのです。

# 自作随筆選

## 動物原理で人をはかる

先日、NHKで「チンパンジーたちの政争」と題してチンパンジーの群れのボス争いの様子を長時間観察し、撮影したものが、宮崎淑子氏の司会で、立花隆氏などの話を挿みながら、放映されました。

ちらちらと見ていても、チンパンジーのボス争いの様子はよく分かったのですが、それに対する出演者のコメントが、お粗末というか、人間とは何かがまったく分かっていないと感じさせるもので、頂けませんでした。

細かいことは省略しますが、頂けなかった主な理由は、チンパンジーのボス争いを知ること、人間の政争を知ることができるとしていたことです。

人間は猿と共通の祖先から進化しましたが、猿の原理を超えたから、精神としての人間に進化したわけです。ですから、いくら猿を調べても人間の精神原理を知ることとは不可能なのです。それは、生命（動物）は物質から進化しましたが、物質の原理を知っても、それで生命の原理を知ったことにはならないのと同様なのです。もち

ろん、生命の変化に対応した物質の過程を明らかにすることはできるかもしれませんが、それは、どこまでも物質過程でのことで、生命固有の原理を明らかにした訳ではないのです。物質の世界が豊かにはなりません、生命の世界の原理が豊かになつたわけではないのです。

これは、生命と精神の関係についても同様です。人間社会に存在している争いが、動物にあつたとしても、それで人間が明らかになるわけではありません。それは、どこまでも動物の行動原理を明らかにすることであつても、人間の行動原理を明らかにしたわけではないのです。なぜなら、人間社会の争いには、必ず動物社会のそれを超えたものを含んでいるからです。そこに人間にしかない要因（例えば、意識では「人の心を感じるころ」であり、無意識では「安心立命」に至れること）が含まれているからです。それを考慮しなければ、人間の行動を判断することはできないのです。

心理学者や生物学者のような科学者は、複雑なものをより単純なものに還元して説明しようとする傾向がありますが、でも本当は、精神の固有な原理を生命の原理では説明できないのです。そうすることは、人間を動物に引き下げることになっていくのです。

敵に気をつけたいものです。

自作詩短歌等選

益ある文句

法句経（一）  
無益なる  
文句千たび  
語るより  
聞きて心の  
静まれる  
益ある文句  
一つでも  
聞きたる方が  
ずっと優れり

おごる医師

おごる医師  
ひとのいのちを  
もてあそび  
機械くすりで  
延命し  
機械くすりで  
縮命させる

登った人だけ分かる

山の上のことは  
山の上に  
登った人だけに  
分かる

ギブ・アンド・テイク

近代は  
ギブ・アンド・テイクで  
はじまり  
いま  
テイク・アンド・テイク  
に至っている

育つ早苗

二日見ぬ  
さとの早苗の  
青さかな

自己の拡大

ここから  
引き返すには  
ギブ・アンド・ギブが  
いる  
自己の  
有限な拡大は  
他者からの  
愛の奉仕を  
求める

休耕田

鳥たちの  
休らう広場  
休耕田

自己の

無限な拡大は  
他者への  
愛の奉仕を  
行う

## 釈尊のごとば（四八）

法句経解説

（一七一）さあ、この世の中を見よ。王者の車のよ  
うに美麗である。愚者はそこに耽溺（たんでき）す  
るが、心ある人はそれに執着しない。

あまり難しい言葉はありません。

この世の中は美しい。愚かな者はそれにふけり、おぼ  
れるが、心ある人はそれに執着しない。そういつている  
だけです。でも、それが真に理解できているかどうかは、  
言葉の意味が分かるかどうかとは、関係ありません。  
世の中には綺麗なものがたくさんあります。例えば、  
花です。でも、花に耽り、溺れる人はめったにいません。  
なぜなら、それは、人間が花のような美しいものを求め  
る欲求はもっていますが、しかし、人間を耽溺させるほ  
ど大きな欲望ではないからです。

でも、二大欲望と言われる食欲（物欲）や性欲の対象  
になるようなもので美しいものは、そうはいきません。  
多くの人は、それに執着してしまいます。

例えば、性欲で見えますと、これまでの権力者の殆  
どは、美しい女性と思えば、直ぐに側室にしました。中

には何百人ももった人もいました。

現在は、フリーセックスという言葉さえあるほどで、  
性欲への執着とその満足を求める傾向は、社会拘束力の  
弱体化に呼応して、高まってきているように思われます。  
かつての性道徳は乱れに乱れています。エイズの流行は  
それへの警鐘と受け取れます。

食欲（物欲）も、美味しいものがありますと、多くの  
人は耽溺します。毎日、美味しい牛肉を食べ、美味しい  
高級魚の刺し身を食べ、太り過ぎを気にしています。  
そして、栄養やカロリーの取り過ぎで成人病になつてい  
るのです。

仏さまからお預かりしたこのいのちを大切にしてい長生  
きするためには、カロリーを取り過ぎないことが第一な  
のです。

美味しいものへの執着さえなければ、腹を減らせば、  
どんな質素なものでも美味しく頂けます。

さらに、美しい「物」への耽溺もお金持ちの多くの人  
に見られます。高級な外車、お城のような家、贅沢なそ  
の中の造作や調度・装飾品、高級で贅沢な身にまとう品  
々、など様々なものがあります。財産に至ってはきりが  
ありません。

しかし、「心ある人はそれに執着しない」のです。財

産は言うに及ばず、欲望にも執らわれません。執らわれないということは、欲望が無いということの意味かもしれません。食欲も性欲もあります。優越欲もあります。しかし、それらに執らわれないだけです。

執らわれないということは、それを満たすために悪をなさないということです。食べるものがなくなれば、悪をなしても食べようとしなないということです。それで飢え死ぬことがあっても、それをあまんに受けるということなのです。

ということとは、我慢に我慢を重ねて、そうするものではありません。こころ安らかにそうできるのでなければならぬのです。

(一七二) また以前には怠りなまけていた人でも、のちに怠りなまけることが無いなら、その人はこの世の中を照らす。 あたかも雲を離れた月のように。

この偈を読みますと、私は、今の大学を思い出します。大学は、一応、文化を創造し、「世の中を照らす」役割を担ってきたように思うのですが、今日の日本の大学教員を見ていますと、そうした意識をもって果して精進し

ているのかどうか、きわめて疑わしいと思えてきます。大多数の教員が「なまけとごますり」に明け暮れているように思うのです。

なぜ、そうなったのか。

原因はいろいろ考えられると思うのですが、その一つは、日本では大学教員は、自己管理できるものと期待されているのに、それができていないということです。大学のシステムとして、学者は精進して研究と教育をし、論文を発表するよう、期待されているのに、現実には、大学教員の資質が低下してきたためだと思いますが、怠け心に流されて、自己管理ができず、怠けてしまい、その結果として、ごますりをして政治的に動くことで人事がなされているということです。

それなのに、現実に合わせて他者管理するシステムにもなっていないのです。国立大学でも、何年もなんねんも同じノートを使って、学生に書き取らせるような教育をしている人がいたり、在職期間を通して、ろくな論文も書かないのに、教授になっている人もいます。

一週間に数コマの授業しかしないのに、国立は給料が安いからと、教育にも研究にも手を抜いて、一生懸命アルバイトの講演会に出ていたり、儲かる教科書や一般啓蒙書や娯楽書のような本を書いたりしています。

大学を「なまけごますり」集団から脱出させ、本来の「世の中を照らす」文化創造集団へと取り戻すためには、他者管理の前提である、教育・研究の個人別業績評価とそれに対応した処遇が求められています。

しかし、そうした大学改革は緒についたばかりで、いつになったら、大学になまけがなくなり、「あたかも雲を離れた月のように」「世の中を照らす」ことができるようになるのでしょうか。

人間は怠け心を克服することは、とても難しいことです。どうしても易きに流れていきます。修行も同様です。ヨーガを十分でも十五分でも毎日続けることは、ヨーガをする事自体は簡単でも、怠け心に打ち克つことができないから、難しいのです。

ですから、それができる人と共に暮らし、その人およびその人の信じる教えを信じて修行することが、とても大切になって来るのです。それを仏教では仏法僧の三宝と言って、大切にしているのです。

(一七三) 以前には悪い行ないをした人でも、のちに善によってつくなうならば、その人はこの世の中を照らす。雲を離れた月のように。

この偈も後半は、この前の(一七二)と同様です。

この偈では、悪を行った人も、後に善でつくなうならば、世の中を照らすことができる、といっています。ありがたいことです。悟りを得ないかぎり人は、常に悪をなして生きているのですから。

私は、この偈を読みますと、殺人鬼であったが、釈尊とめぐり合い、改心して弟子となり、修行に励んだ人のことを思い出します。この話は、テラガーターという経典に出ているのですが、その名をアングリマーラ(指鬘外道「しまんげどう」と言います。この人は、人を殺しては、殺した人の指を切り取って飾りの輪を作り、体に付けていたといえます。そんな極悪なことをしていた人でも、釈尊は弟子にされ、以後は、人から非難されたりして、いろいろ悩みはありましたが、釈尊の導きで決して人を傷つけることのない修行者になり、「この世の中を照らす」ことができるようになったのです。

でも、現代人にとって一つの大問題があります。それは、人類がこの世に悪を積んできた結果、この世が末法の世となり、人々の器量がますます下落して、「自己」への執らわれを増し、自分がなしていることが悪なのかどうかさえ判断ができなくなってきたことです。

かつて、ドリフターズというお笑い集団が言ったギャ

グに「赤信号、みんなで渡ればこわくない」というのと「からすなぜなくの、からすの勝手にしよう」というのがありました。

このギャグは、子どもたちにとっても受けましたが、子どもを超えて世間一般の人々の口の端にもおぼりました。それだけその当時の人々の心に訴えるものがあつたということなのです。

私も、これは現代人のこころを鋭くえぐつたギャグの傑作だと思えます。私は、このギャグは、現代個人主義と個人をつなぐ原理としての民主主義の欠点を鋭く突いていると思うのです。

人々は、個に執らわれ閉じることで、ニヒリズムやファッショへと走る危険を増していますが、それを救っているものが、自己の欲望や快樂、つまり、「自己」の好き嫌いや損得への執着なのです。これは、大学の教員の中にも日常的に観察できます。

ところで、民主主義は、みんなの意見がまとまらない時、議論をして一人一人が意見をいい、その後多数決で集団の意思を決するという制度です。この制度では、人々が議論するとき、それを支えるものは、客観的な正義であり、善悪であり、真偽であり、美醜であり、仁義であると仮定されていると思うのです。人はそれに基づ

いて判断を下すものと期待されていると思うのです。

ところが、現代では、既に述べましたように、議論をする時に人々のこころにあるものは、自己の好き嫌いや損得なのです。あるいは、他者に愛をあげるのではなくて他者から愛（承認）をもらえるかどうかなのです。

つまり、「赤信号」という規則に従う正義など、みんな破れば、あるいはみんなが承認すれば、いつでも無視するということを言っています。そうするかどうかは、基本的に個人一人ひとりの「自己」、つまり「からすの勝手」なのです。それが、善いか悪いかは、みんながするかどうか、みんなが承認するかどうかに係わるだけで、本質的にそれが善いことなのかどうかという判断は、なされなくなつて来ているのです。

それは、いま話題になつていますが、薬害エイズの問題でも、住専の問題でも、オウム真理教の問題でも、学校での子どもたちの問題でも、同様です。問題の原因をなす行為の基準がみんなそうなつていっているのです。私の勤める大学でも何かの「会」がある度に、どの会でも必ずこのことを感じさせられます。

世界中の人々が、日々、ますます悪を重ねて生きています。悪に気付く「善によつてつくなう」ようになる日が一日も早く来ることを祈りたいと思います。

後記

一、もう梅雨もあけそうです。この讃岐では、それほど雨が降らず、どの池も一杯にはなっていない。もし今後日照りが続けば、また水不足が心配されます。

二、私が野菜を作っている畑ですが、カラスの被害に悩まされています。トマトは、赤みが付きはじめのや、いち早くつついて食べます。トウモロコシは、まだ熟れてもないものまで、皮をむいてしまいます。少しでもふくれたようなものは、片っ端からむくのです。さつま芋も、まだほとんど芋は入っていないのに、もうすでに何株も掘られました。魚釣りのテグスが、カラスよけによいというので、先日張りました。しかし、かしこい、どこかの政治家や学者のように、わがしこいカラスです。で、どれほど効き目があるかですが。

三、我が大学は七月いっぱい授業があります。きょうび、どこへ行ってもクーラーのないようなところはありませんが、大学の教室にはありません（小中高もないのでしよう。学校であるのは、自動車学校が予備校ぐらいでしょう）。吹き出す汗を拭きながら授業をしています。

四、私が研究して来た自閉症児の基本障害は、他己の障害なのですが、それが、実は過去の喪失でもあることに、数年前、思い至りました。そして、それは精

神分裂病も同様だということです。そんなことで、時間とは何か、時間をどう考えるかについて哲学的に思索する「時間論」に関心をもち、時間さえあれば、その方面の本を読んでいます。時間は結局、人間が生きているということそのことですので、時間を論ずることはとても重要なのですが、哲学的に考えだすと、とても難しいようです。古来、多くの哲学者が取り組んで来ましたが、私から見ますと、満足の行くものはありません。私の時間論もやっと大筋だけは完成しました。自己は未来、他己は過去、現在はそれら二つの契機の弁証法的運動であり、その統合だとする考え方が基本です。

月刊 こころのとも	平成八年七月八日
第七卷 七月号 (通巻 七十九号)	〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（ひびきのさと 沙門）中塚 善成</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	